

H9.8.7(土) 11人 164P
H6.5.5(木) 10人 1023P
H12.4.10(日) 10人 1023P

文徳117P

5.698P (文徳5.669~5.691) 文徳112P

文徳天皇 2208P

文徳天皇 2208P

第九十六章 平安時代 (下)

菊池城院不動倉十一宇に火

文徳天皇 (日本文徳天皇実録) を見

てみよう

① 文徳天皇の天安二年(八五八)閏二月二十

四日条に、

肥後国言。菊池城院兵庫鼓自鳴

② その翌日の二十五日条に、

又鳴

③ 一ヶ月後の六月二十日条に、

鳴。同域不動倉十一宇火

とある。

ここに菊池城院と記されているが何故に院と

の字が添えられているのだろうか。

院には、①かきをした宮殿。②おくこて

ん。④上皇・法皇・女院の御所。またそこに

住む人の敬称。⑤役所・官庁。⑥寺等を表

宇は、建物を数える

てあら 手荒 1510^P

5,699^P

排字工小島5919^P 15^P

味^P 4533
4536

小林 1023^P
元町 164^P

わす語であるという。(「漢和辞典」小林信明、小学館〈院〉。『広辞苑』〈院〉参照) 先に、
八鞠智城は、高市天皇(舒明上皇)の居城とされたのであろう。と述べた。(第八章十三節八鞠智城の項において既に述べた経緯があったから) 以後、
殿・御所の意味を込めて、八鞠智城のことを八鞠池城院と呼びならわして、
三度も鳴り、そして同城の不動倉十一字が炎上したという。
なるほど詳細は分からないが、
八鞠池城院の兵器庫に集められていた銘のある刀剣等が、ずかずかと入ってきた者達によつて手荒に運び去られ、その激しさ故に鼓がひとりでに鳴ったのだろうか。それと、
兵器庫へ入ると鳴るように仕掛けられた鼓が自から鳴ったのだろうか。

5,700 P

879
858
21

H1.9.24(田) 5698

5698

建物内

●そしてまた、同城（菊池城院）の不動倉
内に長らく保管されてきた書籍が、倉ごと
焼かれて灰になったのであろうか。
なとと、とりとめのない想像される。
〔書籍を運び出す手間を省くため〕

＊

なお、二十一年後、陽成天皇の元慶三年
（八七九）三月十六日条にも、同様の記事が
みられる。

肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴し

とある。

＊

十一棟もの倉庫

推察 543 ④ 5699 1057

5,719^P

(番 5701 ~ 5718)

清原元輔 586^P
908 ~ 990年

喬部元成 169^P
807年に「古語拾遺」を著

綴本辞

平安時代の歴史観について

ハ〇七年に「古語拾遺」を著わした喬部元

成や、清少納言の父清原元輔(九〇八~九九

〇)等は、曰「我國の本当の歴史は、いつてよ

く知っていたようである。

つまり、都が平安京へ移された後において

さえ、一部の知識人達の間では「我が国の

真の歴史は、から孫へ語り継がれていった上に思われ

る。」「我が国の真の歴史は、我が国の

公には何と禁句であつたとしても、真実

は、そんなになやすく亡び去るものではない

のであろう。

本来の日本の歴史を知っている人は、他に

もまだまだ多くいたと推察される。

のだらうで

＊

のだらうで

H9.8.11(月)
H6.5.12(木) 源氏物語(巻)289P
→源氏③202P 新・やまと物語

5,720P-1/2

うそ ぐづ ぐ ぐ
嘘189P 嘘 412P
源氏小室 202P 原文「絵物語」とある。
玉ガサ 源氏物語(巻)286P 289P
④ 460P
⑤ 532P ⑥ 534P 同又

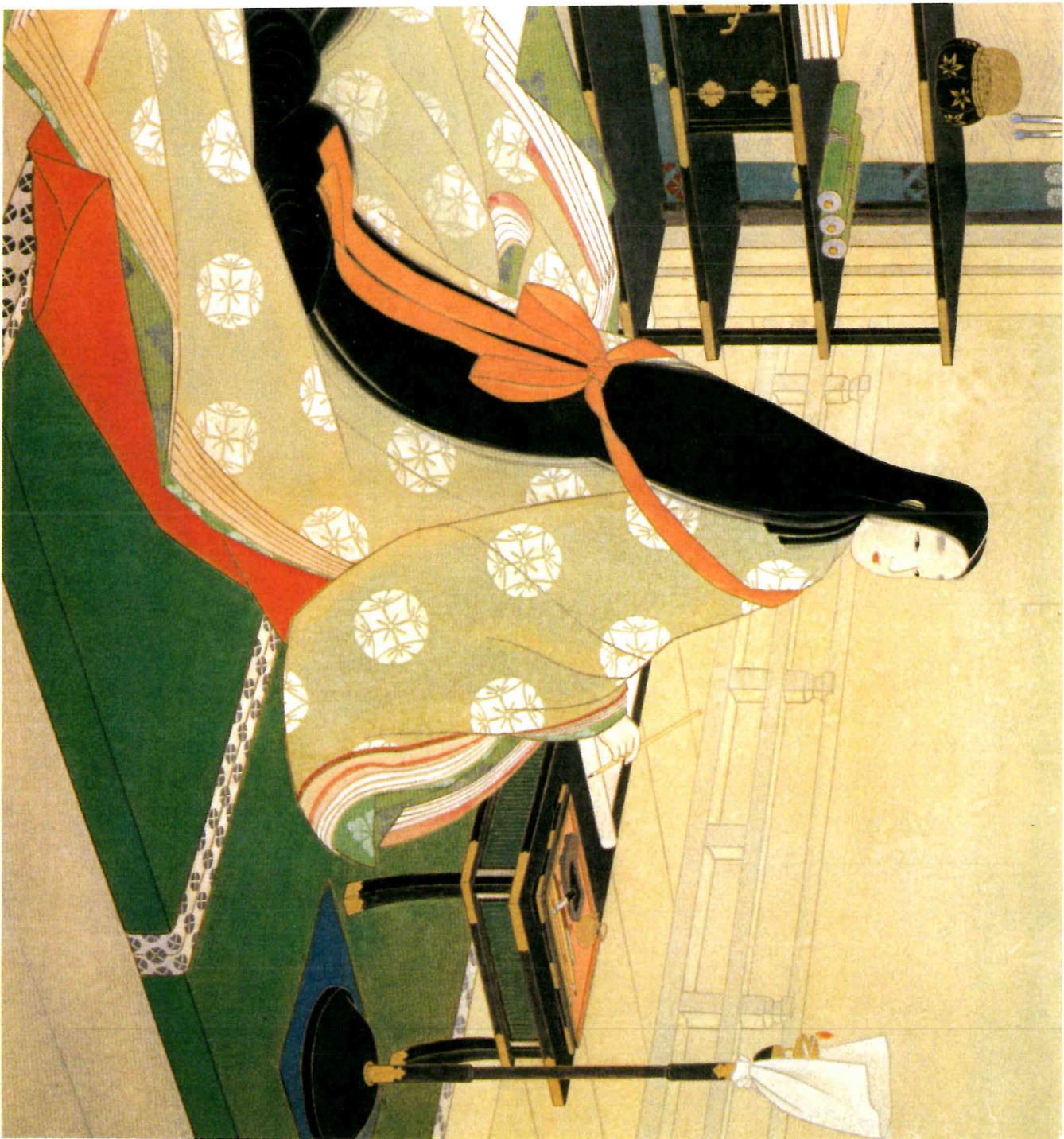
うそ ぐづ ぐ ぐ

源氏一行もの」とがぶり

たね。物語といふものは神代以来この世にある。
のさ止めて、硯を前へ押しやった。
思ひなないのでございますよ。
ようが、けれどもどうしてもほんとうと一か
かいろんな想像をして書くものでございまい
しますか、そうですね。嘘をいい慣れた人
ようずにいい慣れた者が作るのだという気が
多々な人間が作るものだ。嘘をい
源氏はこの御殿にも、ちかごろ絵物語
などか引き散らさへいるのを見て、玉鬘に
こう言った。
「なにかでも注目されるのは、源氏物語の
子・源氏物語、その他多くの書物が書かれた。
平安時代には、竹取物語・伊勢物語・枕草
」

・カラー
・左頁の全面に、はみ出して「限度一杯」大々掲載下さい。

328^r



5,720^r - 2/2

328

110^r 川崎小虎筆 *たけ*

140^r 第559回 紫式部

紫式部

紫式部

第559回

140^r

130^r

120^r

『名画にみる国史の歩み』編者、所功、近代出版社、平成12年4月19日発行、28頁参照。
推定26歳ころ藤原宣孝と結婚し一女を儲けたが、3年後、夫に先立たれ、そのころから『源氏

物語』を書き始めた。

『源氏物語』

『源氏物語』

『源氏物語』

『源氏物語』

石山寺へ参籠した際、湖水と輝く菊月を眺めるうちに物語の構想が浮かび、『大般若経』の紙背に書き始めた、という伝説がある。

違

日本紀 1702
日本書紀 5721P

源氏 204 113

元 1702P
日本紀 = 日本書紀のことである
↓ 原文

源氏 204P

細 104P

こと

こと

た ことを書きのこしたものといます。日本
 紀などはただかたそは(片はし)にすぎず
 のです。こわ物語(の)にそ、かえって公の
 道理にもかなない、委細を尽くした事柄が書か
 れてゐるのでしょう
 と言つて、源氏はお笑ひになつた
 というのである。(「源氏物語」(3) 日本古典
 文学全集、小学館、二〇四頁。『源氏物語』
 上巻、河出書房、与謝野晶子訳、二八九頁参照)
 紫式部は、
 (六国史)などにはただほんの一部分しか記
 載されておらず、――物語などの他の書
 籍の方にこそ、かえって正確な事柄が書かれ
 てゐる
 と感得てゐたに相違ない。(第559回 紫式部参照)
 おそろく
 へ紫式部は、日本書紀を読んだことがあり、
 また日本書紀が真実の歴史のみを伝える書物でな
 いことを知つてゐたからこそ、――このよ

片はし

六国史のこと

H9.8.11(月)
H6.5.13(金)④
→

手帳の4小
紫式部日記 ドナルド・
78頁
5.722

5.722 朝日新聞
紫式部日記 78頁
内巻(ない) 783頁
5.722

読む 2290
紫式部日記 78
紫式部日記 78
紫式部日記 78

紀小36 (紫式部日記)

うな言葉を源氏に言わせたのであろう。
と想到さふ。
それにして、日本書紀にこの上もな
く神聖視されていた時代に、
これだけめいことと堂々と書けたものだ、と感
服させられる。
■なお、源氏物語を人に読ませ、それを
お聞きになつた一条天皇は、
「この人(紫式部)は日本紀をこそ読み給
ふべけれ。まことに才あるべし」
とこの人は日本紀(日本書紀)を読んでい
るのだらう。才能あるね。
とおっしゃったという。(「紫式部日記」岩
波書店、三〇一〇一五七。朝日新聞、平
成十二年一月九日付「源氏物語絵巻」参照)
■ところが、一条天皇の仰せ言の真意をよく考
えもせず、早のみにみえた左衛門の内侍は、
「いみじうなむ才ある」
「ハ学問を鼻にかけている」
と殿上人などに言い散らして、紫式部に「日
本紀の御局」と「あだ名を」つけたという。

一系
後朱雀
後三条
後白河
堀河

次領
59258
栄華

百科事 2-313
(表セ)「こころ」
5738-1/3
5.723P

日本社 886
能本の伝説 82
平山 227
田川 227
相良 227
吾平山 227
相良 227
吾平山 227
相良 227
吾平山 227

相良観音・吾平山陵
熊本県鹿本町の北方、山中(菊池川の支流内)
田川の上流には、相良観音で有名な相良寺(吾
平山)がある。この相良寺は、平安朝
初期の弘仁年中(八一〇-八二四)に最澄が開
創したと伝え、比叡山延暦寺の末寺である。
尚、淀川上流域(京都盆地)の東北方に比叡山
延暦寺があり、淀川に相当する「菊池川」
の上流域(菊池盆地)の東北方に相良寺がある
相良寺の本尊は千手観音は、後朱雀天皇
(一〇〇九-一〇四五)の皇后がお産のお
在位一〇三六-一〇四五)の皇后がお産のお
り、この観音に祈願して無事に皇子を御出産
されたので、やがて以来安産と子授けの靈験あ
らたかな観音様として広く知られることにな
り、祈願のための参拝客が絶えなない。
このころで、後朱雀天皇の母は藤原彰子(藤
原道長の長女)であり、この頃は藤原氏全盛
の時代であった。藤原氏のこの繁栄を思うに
ついても、

H29 (2017) 11.6~10 (4回)
H30 (2018) 11.29~11.30 (2回)

H9.5.11(月) 日本社 886
→ H1.10.3(金) 日本社 886

吾平陵 701P=2/6 159.199

日本社 886
地上185P末186P

なつ 1660P
懐かむ 蘇我の本居 紀下210P
うぶすな 蘇我の本居 紀下210P
やか 1868P

5,724P

改訂

へ藤原氏の流水をくむ者達は、密やかなが
ら、中臣氏のもととの本居の地である
菊池を懐かんだ✓
ように想察される。菊池の字には、昔が含まれている。
つまり、後朱雀天皇の皇后も、菊池をはるば
る訪ねておいでになり、相良寺の千手観音
に祈願され、無事に皇子を御出産されたの
であらう、と思われる。
相良寺の西方には、鶴嶋草葺不合尊の御陵と
伝えられている。吾平山陵がある。神代紀末尾
には、日向の吾平山上陵と記されている。
神武天皇(継体天皇)の父あるいは祖父の
御陵なのかも知れないが、確認はない。
また参考にしたと、相良寺には、日本
じゅうでここ一か所しかないという「アイ
ラトビカズラ」(国指定特別天然記念物)の
古木がある。学名マメ科クスモダマ属の一種
で、揚子江流域にある油麻藤と同種であり、
昔、中国の僧が持ってきたと語りつかれている。
(「日本社寺大観」名著刊行会へ相良寺)。
熊本の伝説「角川書店、八二頁参照」

屋根をふくの 新やま 138
 幸か不幸か 125
 265
 272

紀328 359
 11たふきの200 P
 5,725

うしハ 小林
 後人 374
 紀下406 410

→ H1.7.30月日

証拠隠滅

茅・土などを素材として作られた木・竹・
 時とともに朽ち果ててしまふことが必定であ
 った。

さらに、栄華を誇った日都呂でさえい
 ったん帝都としての地位を失うと、善美を極
 めた宮城、整然とした街並みなどの全て

京城

がたちまち灰塵に、ハローハローやが
 ての痕跡さえも残さず、まるで泡沫の夢で
 あったかのように消え去ってしまうのだっ

飛鳥浄御原宮

板蓋宮・藤原京・平城京等々のかつての都

か、例外なく平安時代のただ広漠とした田畑や

荒地になつていた。半は頃には

こうした事実から推して、大倭国（肥後国）

に栄えた都が、今後、後人によつて見い出さ

れる心配は全く不要である

可能性はほとんど無い

コクヨ ケー20 20x20
 7あった 広漠ははく広はま だった

5,726^P

こと 次

「都の跡も無いのに、都があった所を探
あてられるわけがない」
・当時、あつたは、そう考えら小たのではな
かうか。
*とはいえ現代にありては腐つて消えてし
まった宮柱の跡までもあきらかに得るのだ
*しかしその頃、そんなことなど考えあふ
はずもなかったように推察される。
から、不可能とはいえない。

米

⑤5731Pの●に続く 5.722P ⑤5728P 3/30 人海戦術 多人数の内、仕事を分担してやること
 握り起こさぬ 1人か10人か 1142P
 ⑤5732P 1/1 掘り起こす

H1.7.31(月)

返し繰返し掃除された。
 ①特に、日都の溝という溝は、入念に、繰返し掃除された。
 考えられ、そのまま放置されたの
 はなからうか。
 木簡・その削りくみ等は、いすれ腐つてしま
 け。あとかたもなく消えてしまふと
 *もつとも掘立柱が土中に埋もれた部分・
 と推察される。
 製品・土器の類を識別し、取り除いたで
 (2)大々的な人海戦術でもつて、金属製品・石
 路の下の上の中までも掘り起こす
 (1)そこで、各部の側溝の中はもちろん、居住域や道
 ようである。
 を見い出されることか、何よりも恐れられた
 品。広く浅く
 へ知られたくない重要な「真実の」証拠
 からの、将来、たとえ偶然にでも、
 その所在を隠し、ようのない都の溝や土の中な
 どれにても、平城京・平安京・大宰府など、

⑤5735
 29

(平安京)

(市街の道路)

「京中の街路および溝は修理せしむべし」という令が斉衡二年（八五五）の大政官符にみられ、また延喜式・左京職条にも、
「毎月掃除すべし」との規定がみられる。
・京中のあらゆる溝を修理させ、どぶさらいさせ、落ち込んだ物を除いた。
さらに、奈良時代の都として繁栄を極めた平城京の東三坊大路東側溝の発掘調査では、九世紀後半の遺物が多く、奈良時代のものは少なく、
「平安前半に改修が行われたのであろう」と報告されている。（「西都大宰府」藤井功亀井明徳、日本放送出版協会、一四六頁参照）
木曾川にさがる時、帝都でなくなつてしまつた平城京の溝さらえなどせず、放置すればよさうなものなのだが、――平安前半頃にはゆえあつて、奈良時代の遺物が除かされたのだらう、と推察される。
一方、大宰府については、二十年間も掘り続けているのは、古代の

Spilo 5728^P 下端

5.728^P-3/3

掘り起217の5729^P中央
同頁 266^P

259^P-3/2
湿原の南方部分の埋立工事
継続中
Spilo 5728^P

③ところでは次のような不審点がある。
(1)平城京の朱雀大路(下ツ道)は、
朱雀門から約二二〇メートルが復元されているけれど
ほとんど痕跡さえ残っていない、という
(「朝日新聞」平成十六年六月五日付へよみ
かえる朱雀大路参照)
奈良盆地の
・朱雀大路は、もとから陸地であつた南
域部分を除き、また、北の方の大部分が、石ごとそ
投入して築いた。北の方の大部分が、石ごとそ
くり掘り起こされた。これは、石等を掘り出して撤去し
なからうか。
*もしもそうなら、石等を掘り出して撤去し
た痕跡が残っている筈だろう。(既述)
(2)藤原京跡から下中ツ道(中ツ道)が初めて発見さ
れた。中ツ道は、これまで平城京の南側など
で側溝の一部とみられる遺構が出土している
だけだった、という。(「朝日新聞」平成十
五年六月十七日付へ壬申の乱舞台「中ツ道」
発掘参照)
・察するところ、中ツ道も、湿原を縦走して

ガ
ブル

113
た
て
て
い
る

5,728^p-3/3

同又 269^o

いた部分がごっそり取り除かれたのであろう
と思われろ。

④ 一方、大宰府について、こう述べられてい

る。
二十一年間も掘り続けてゐるのに、古代の

前後
12行
たろう

46.5.14(土) ④

西条市 145 九条七坊向路

5.729P

西条市 143 547E

は鎌倉期に下る。のが多い。
から出土する遺物は、上限が平安後期、多く
町のところに到る。この道路は七坊の中央
御堂川をこえて観世音寺の中軸線から東へ一
を南北に走る小道とみられ、北に延長すると
あることを確認した。この道路は七坊の中央
両溝に挟まれた部分の幅二・六以下が道で
に平行する幅一・五以上の東溝を検出し、
南北に延びる幅一・二以下の西溝とそれ
た。この左郭の九条七坊にあたる
溝に挟まれた部分の幅二・六以下が道で
に平行する幅一・五以上の東溝を検出し、
南北に延びる幅一・二以下の西溝とそれ
あることを確認した。この道路は七坊の中央
を南北に走る小道とみられ、北に延長すると
御堂川をこえて観世音寺の中軸線から東へ一
町のところに到る。この道路は七坊の中央
から出土する遺物は、上限が平安後期、多く
は鎌倉期に下る。のが多い。

条坊遺構が出てこない
という。(「福岡の古代を掘る」朝日新聞福
岡本部編、葦書房、三八頁参照)
大宰府の全域にわたって、条坊遺構が無く
なるまでの徹底した掘り返し作業が行なわれた
のを示唆しているのだろうか。
それでも、両側溝の存在から、条坊遺構の
確認が可能な場合もある。
① 一九七二年、大宰府町大字大宰府字平野
において、はじめて条坊遺構の検出に成功し

側溝はかなり
広くて

② この遺跡から東へ二・五町、北へ一町の場

所へ大字大宰府字月見山に於ても、一九七

四年に、西側溝をもつ南北道路が検出された。

・道幅一四・八メートル、東側溝は幅五・八メートル、深さ

一・二メートル、西側溝はやや小さく幅四・二メートル、

深さ〇・八メートルであった。この南北路は、左郭九

坊と十坊の坊間路である。東側溝の溝底から

鎌倉前期の口貞元三年丑（一一二四）の墨書

木札が発見された。これは、さきの九条七坊

の遺物と同様々時代の下のものである。

③ ところが何と遺物探索（証拠隠滅）事業に手技かりがあったようだ。

・大宰府条坊調査の興味深い例をあげてみよう。

大宰府蔵司の南側大楠地区を発掘調査

したところ、南北方向に二条の溝があり、東

側溝（幅十三メートル、深さ二メートル）から西へ約十八

メートルのところに西側溝（幅一・五メートル、深さ〇・

五メートル）を検出した。西側溝間の南北路は、右郭

二坊と三坊の坊間路である。東側溝は規模の

大きい溝であり、この堆積層中の遺物を見る

と奈良・平安前期の間のものがほとんどで、

平安後期の遺物はみられな。この溝は政庁

くらつかさ
蔵司 2649
5,730 P

昭和1121
木札 西太 165
ハ 84 坊 33
5734

由5729'の●に続く
由5734'の●に続く
西都大宰府146'

5731'

はにき
土師器
元1782'
赤焼きの土器

西都大宰府144'

から四条大路に沿って東西方向に流れた水
を大宰府中軸線から西へ二町(二一八)
のこの地奥で直角に曲げ、南北溝で南の御笠
川へ流す役わりをもっていた。――かゝ水路を
自然地形にさからう形で直角に曲げる計画は
机上では可能でも実際は無理なもので、このた
め平安前半期という比較的早い時期に役立た
ずで廃棄され、埋められたと見られる。溝か
ら木簡をはじめ須恵器、土師器、越州窯青磁
など多量が出土した。これは、溝の東台地
の官衙(府庁)の廃棄物であろう。
という。(「西都大宰府」藤井功・亀井明徳
日本放送出版協会、一四二―七頁参照)
なお、平安末の鎌倉の時期はすでに大宰
府古代権力の壊滅してしまっていて、郭内の
道路を補修したとは考えにくい。
● 大宰府の平安前期と後期頃の中央政庁は、
大宰府の地の全域を掘り返して、後世に伝わ
るものを大きくしようと務めたのであろうと

5,732^P

はぶ
所在 1120^P 辛うて 476^P

思われる。

● こうしたわけで、平城京や大宰府の側溝から、奈良時代、平安前半ころの遺物が見い出されることは、大宰府が古代の条坊遺溝が検出されることも少ないのであろう。

● おそらく平安前半期という比較的早い時期に埋められた大宰府蔵司の南側の溝は、いつしか所在の所在さえ分らなくなっていたのであろう。

● 東西側溝の底部は、その当時の姿のままの姿を現わしたように推察される。

(*)

五丈八尺
五丈六尺
五丈四尺
五丈二尺
五丈
四丈八尺
四丈六尺
四丈四尺
四丈二尺
四丈
三丈八尺
三丈六尺
三丈四尺
三丈二尺
三丈
二丈八尺
二丈六尺
二丈四尺
二丈二尺
二丈
一丈八尺
一丈六尺
一丈四尺
一丈二尺
一丈
九尺
八尺
七尺
六尺
五尺
四尺
三尺
二尺
一尺

小林 105° 小林 938°
 5.729 5.733 P

⑤ 5729^P 西塔 147^P 間

改行

井明徳、日本放送出版協会、一四五と一四七頁参照
延喜式・左京職の条に、平安京の坊路数値

か記さ小ている
宮城東と西にある南北路を除くと
は大路と小路と側溝からなり、
京中の路

①大路は通路幅五丈六尺（約一・六・八尺）

② 小路は通路幅二丈三尺（約六・九呎）
幅三尺（約〇・九呎）と規定されている。

図先に述べた大宰府字平野の小径左郭九条
 七坊間路の道幅は、二・六メートル以下である。

延喜式の小路でも路幅は約六・九呎であるの
 この坊間路はそれ小に及ばず、小径の類
 にか属する。
 一かし、側溝幅は西で一・二呎、東

は一・五以上と朱雀大路なみである。それ

H19 (2007) 4. 20
H29 (2017) 11. 7 ~ 10 (7回)
H31 (2019) 4. 30 (4) ~ 4. 30 (3回)

5,735^P

F 4/30
4/30

*

か発見されたという。
^{（ようこじんめつ）}ともあれ、^{（いばうきやう）}平城京・^{（いあんきやう）}平安京・^{（だいさいふ）}大宰府などで
^{（と）}証^{（と）}拠^{（と）}陵^{（と）}滅^{（と）}のための^{（と）}溝^{（と）}さうい^{（と）}か^{（と）}徹^{（と）}底^{（と）}一^{（と）}行^{（と）}な^{（と）}れ^{（と）}
^{（と）}取^{（と）}り^{（と）}に^{（と）}ぼ^{（と）}ー^{（と）}も^{（と）}少^{（と）}な^{（と）}か^{（と）}つ^{（と）}た^{（と）}か^{（と）}ら^{（と）}ー^{（と）}奈^{（と）}良^{（と）}・
^{（と）}平^{（と）}安^{（と）}時^{（と）}代^{（と）}の^{（と）}遺^{（と）}物^{（と）}が^{（と）}ほ^{（と）}と^{（と）}ん^{（と）}ど^{（と）}見^{（と）}ら^{（と）}れ^{（と）}な^{（と）}い^{（と）}の^{（と）}で^{（と）}あ^{（と）}
ろう、と推察される。

5727
317

日本の史(3)読後170P

5,736P

きゆう 云554P
杞憂 将来のことについてあれこれというめい心死
すること

おうほう云266P

往生 極楽浄土に生れぬめい
日本史(3)読後169P
きんぽう 云2085P

世は末法

地獄へおちるか、それとも極楽浄土に往生

できるか。

そんなことは、現代においては全く問題に

ならない。

しかし、平安時代のなかばころから、これ

が貴族にとっても庶民にとっても特に切実な

関心のまとなった。気の弱い、いかにもま

めなものも考えようとする人間ほど、来世に

ついてあれこれ悩むのだった。古来

もつたとしても極楽浄土といっても、いろいろ

考えられしてきた。彌勒の兜率天浄土というものが想

象された。

そこは、現世を、よりにぎやかに、ゆたか

にいたような世界だと考えられた。

また、観音の補陀落の浄土もあった。

紀州(和歌山県)の熊野の南の海中に、そ

唯 1373

日本の歴史(3)読売171
ひいて45う 上4下

5,737^P-1/3

ひきと3

日本の歴史(3)読売170^P

5880^P

ひたすら念仏を聞いていた、と日栄華物語は
と言つて密教の祈禱などをこつた道長は
と唯念仏のみぞ聴くべき
ぎつていた。
その手に、阿彌陀如来にひいてもらう糸をに
北まくらにいて、西向きに寝た道長は、
終えた。
長は、法成寺の阿彌陀堂で六十二歳の一生を
万寿四年(一〇二七)十二月四日、藤原道
る人たちが少なくなかった。
かたく信じて、合掌念仏しながら息をひきと
蓮花の音が咲きみだれた世界である、という
ハスの花
このように麗しい西方浄土へ往生を
土はあり、けからわしい現世と違ひ
全然異なる、きよらかで華やかな下
違ひ、阿彌陀の西方浄土である。
のちの浄土教が描いたものは、それらとは
れが想像された。(後述)

ひたむき 1870 日本の上(3) 読 172

こと「ひたむき」を

5,737 - 2/3

教え 娘 9 所

という 娘 9 所

ひかし

電

はいるーている。

西方には、貴族達にとって心のふるさとと

いうべき古京の地（九州）があり、会稽や

吳国があつた。そして又、その遙かなたに

は、仏教の発祥の地である天竺（インド）が

あるという。

貴族達は、西方があなたに浄土があるという

教えにひかれ、固く信じるようになったとい

ったのかも知れない。

*

現実

現在の世（現世）の生活を

とるにたりないものとし、希望をただ一途に死

後の世界につなぎ、阿弥陀の名号を口にとな

えることによつて浄土への往生をめざすとい

うこの浄土教が、十世紀あたりから急に広く

勢力を得ていったのは何故だろうか。

この当時、藤原氏は、宮廷で他代め勢力の

排除することに成功し、その専制政

ひげくえ 1873^p
逼迫 困窮に 172^p下
者 幸 姫 64^p

5,737^p - 3/3
心ひかれる
5738^p 3/3

さだめことえ 891^p
定事 定めた運命

味のF史(B)
172^p下
味のF史(B)
172^pと

→→→
次頁から

改行

治を確立するにいたっていた。
●かし、摂政関白と云って、その子孫が
皇子を産まなにかぎり、どうともならず、夢
はくだける事になる。それが前もって定め
られた運命であり、前世からの約束ごとであ
るものならば、自分の力ではどうしようもな
いわけである。
●だから、現世の定事を諦め、むしろ来世
に希望をおく教義に心ひかれるのは、自然の
なりゆきであつた。

●他方、荘園制が発達し、権力者がますます
富み栄えていったのは、反対に、中・下流の
貴族たちの生活は、目にみえて苦しくなつて
いった。
●同じ藤原氏一門でさえも、その中のごく一
部の者達に権力が集中していったから、他の
多くが逼迫した。
●このようになつて、情勢の中で、人々の現世における
希望など、先ゆきが知れてゐる。

7 172^P

172上

う 云 ぼんけう
憂 ± 182 没入云 2043
「こは3じ」 5723 5,738^p -1/3
5771^p

壞
L
7
た
い
0

正法 元 1119
証果 元 1083

5738-2/3

漸く 元 2273
漸く 元 1295

前 486
1052
1538

④ 人な浮き世(憂き世)に夢をゆつより

念仏によつてとこーえの極楽へ往生したい、と

人々が願ったのも無理はなかった。(7日本

の歴史(3) 平安貴族、読売新聞社、一六九し

一七二頁参照)

⑤ なお、釈尊入滅後の仏教流布の期間は、次

の三つに区分して考えられた。

① 正法 釈尊入滅後の五百年または千年間

正しい教えが行なわれ、証果(悟りの結果を得る

こと)があるという。

② 像法 正法の次の五百年または千年間。

教法は存在するものの、信仰がだんだんと形式に流

真実の修行は行なわれず、証果を得るものかな

いとする。

③ 末法 普通には像法の後の一万年をさし

仏の教えがすたれ、教法のみが残る時期とさ

れる。

④ そして、末法思想について、

末法に入ると仏教が衰え、とする予言的

思想で、

中国では隋代頃に流行し、日本では平安後期から鎌倉時代にか

んきよ
振込 560

560
-480
80

前486
後1052
1538

560 前480
560 P
5.738 - 3/3

1やかむ
元1024 百利 18-8P
5737-3/3

かたて 4191
仮託 かつけること
5742-3/3 942

1/9
両財
384
2271
14年

いた のである 最澄に仮託される 末法燈

明記 によれば、一〇五二年に末法へ入ると

いわれ、源信や源空らの浄土教、日蓮の法華

宗などで主張された (法然の諱)

という。(「広辞苑」へ正法・像法・末法・

末法思想・証果参照)

一方、釈迦の死去の年代に關しては、だい

たい次の三つの説がある。

①前五四四と前五四三年説。セイロン、ビル

マ、タイ、カンボディアなどの南方仏教諸国

では、この説を採用し、彼らの紀年暦として

いる。

②前四八〇年ころの説。西洋や日本で一般に

ひろく採用されてゐる説である。釈迦はハ〇

歳で入滅(死没)したとされるから、この説

によればその誕生は前五六〇年ころとなる。

③前三ハ〇年ころとする説

の三説である。(「世界大百科事典」平凡社、

「釈迦」参照)

そして、より詳しく、

5,739^P - 1/2

前 486 500年
後 14 1000年
前 380 500年
後 120 1000年

はねたえ 1024^P
電フミナガ

入戒した
ともいう。(「広解苑」へ釈迦牟尼参照)
何等かの計算根拠は、
か、ともあ水平安朝当時、
へ永承七年(一一〇五二)に、末法へ入る
と信じられたのだった。

四八六年に拍尸那揭羅の婆羅双樹下で、ハの
歳の時へこの年齢について異説があるに
釈迦牟尼(普通には釈迦という)は、前
前13年 前15年

(*)

は

H9.8.12(火)
H6.5.15(月)⑥
→

日本の歴史 ③ 173 元
読え 握りぬる 1687 5,739 P - 2/2

おおか 謡歌 元264
日本の歴史 172 読え
日本の歴史 ③ 173 上 読え

1052年(元) 5738-1/2
- 1027年(元) 5737-1/2
25 但(この当時の数え方
では26年

この世をばわが世と思ふ望月の
かけたることもな一と思へば
と歌った藤原道長も、
「末法の世が、二十数年後(二十五年後)
のまぢかに迫っている」
という話を、噂を聞いていたに違いない。
・栄華の限りを尽した藤原道長は、
「やがて末法の世になるとはいえ、来世に
おいてもまた、――是非とも、この世に劣
らぬしあわせを」
と願い、未来世に希望をおく教えに心をひかれて
阿弥陀如来にひいてもらう系を握りしめ、
念仏に聞き入っていたのかも知れない。
■ かくて末法にはいるという永承七年(一〇
五二)、関白藤原頼通は、父(道長)から受
けついだ宇治の別荘を寺に改め、平等院と名
づけた。そのあくる年には、阿弥陀の像を安
置する堂が完成した。鳳凰堂とよばれて今に
のこる。壮麗な建築である。「日本の歴史」
(3) 平安貴族、読売新聞社、一七三頁参照)

(*)